

(2023年6月29日配信)

NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」

7月6日(木)4時台

## 「三味線トークの魅力語る」

出演 杵屋 邦寿 長唄三味線方

聞き手 坂口 憲一郎

杵屋邦寿さんが、長唄・三味線始めたのは18歳の時。それから48年、、、今、三味線一人ライブを行っている。長唄と三味線を一人で演じるもの。演目は、歌舞伎や落語や昔話、自作のオリジナルなど多彩。古典芸能になじみのない方にも、判りやすく、親しめる演技は、海外も含め、500回を超える。歌舞伎の名場面、一人勧進帳のさわりを実演していただきながら、杵屋邦寿さんの伝統芸能への思い、長唄・三味線の魅力を語っていただく。

### 坂口 憲一郎 (岡山 ハソウを楽しむ会)

- 2016年7月記 -



盛岡、東京から岡山に帰り、7月12日1本の映画を見た。30年近く取材をさせて戴いた倉敷市在住の永瀬 隆さんのドキュメンタリー映画「クワイ河に虹をかけた男」である。クワイ河は、タイ国に流れる川。映画「戦場にかかる橋」のモデルになった所である。

日本軍は、タイとビルマを結ぶ重要なルートとして415キロの区間を、わずか1年3ヶ月ほどで完成させた鉄道で、動員された英連邦の捕虜6万8000人と20万とも30万ともいわれるアジア各地の労務者が建設にあたり、焦熱地獄の過酷な気象条件とマラリアやチフスが、人々を襲い、鉄道の枕木1本に、一人が亡くなり「死の鉄道」といわれた。

永瀬 隆さんは、憲兵隊通訳として捕虜の取り調べに立ち会った。日本軍降伏後、連合軍の案内役を命令され、沿線の墓地埋葬調査に同行。現場で、初めて日本軍の行った行為、戦争のむごたらしさを知ることになる。さらに10万人の日本兵が日本に引き揚げるとき、タイ国政府が、一人一人の飯盒に、コメと砂糖を支給してくれたことを責任者の永井海軍少佐から打ち明けられる。日本兵が国に帰っても、食べる物もない状態だろうからとタイ国が支給してくれたという。このことは永瀬さんしか知らないこととなる。というのは、永井海軍少佐は、最後の引き揚げ船で帰るとき、多くの兵を死なせた責任を取り、船から身を投げたと戦友から聞かされ、あれは永井海軍少佐の自分に託した遺言なのだと思う。

その後、タイ国への恩返しと慰霊のため、海外渡航が許されるようになった1964年以降、135回、タイを訪れ、貧しい子供たちへの教育支援を行ってきた。また、現地にタイ式の寺院を建立し、敵味方を超え、戦争で亡くなった方の慰霊を続けてきた。

永瀬さんも、2011年6月、93歳で亡くなられた。

戦後50年の1995年、永瀬隆さん、青山学院大学教授の雨宮剛さん、国際基督教大学副学長の斉藤和明さんの3人が呼びかけて始まった「英連邦戦没捕虜追悼礼拝」が、今年も、8月6日(土)午前11時から、横浜市保土ヶ谷区狩場町の英連邦戦死者墓地で行われ、永瀬 隆さんから託された「平和と和解のメッセージ」が、世界へ発信される。映画「クワイ河に虹をかけた男」は、東京では、8月下旬から上映される予定。

映画の後半部分、永瀬さんの葬儀に寄せられたイギリス人捕虜で、和解して親友となったエリック・ロマックスさんの弔電代読をしている私もまさか出てくるとは思いもよらずびっくりしました。